場所の感覚を定位する：
エコロジカル・アイデンティティをめぐる覚え書

メタデータ	言語: jpn
	出版者:
	公開日: 2017-10-03
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 生田, 省悟
	メールアドレス:
	所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/17727

《研究ノート》場所の感覚を定位する

——エコロジカル・アイデンティティをめぐる覚え書き——

生田省悟

私たちはまちがいなく今、環境の時代に生きている。「環境」に関わる多種多様な言説が氾濫するなか、いわゆる環境意識ひとつをとってみても、その高まりを如実に示す事例には枚挙にいとまがない。ごく身近な市民レベルの運動に眼を向ければ、たとえばゴミの分別収集、リサイクル運動、里山の保全活動が積極的に推進されている事実が確かにある。あるいは政治面でも、国内では環境関連法の策定や公共事業の見直し論議も挙げられようし、国際的には地球温暖化防止にかかわる軋轢などを容易に指摘することができる。そればかりか、環境政治学や環境経済学、あるいは環境文学というように、「環境」という冠を戴くさまざまな学問領域が提唱され、それぞれに理論の構築が急速に進行しているという現実さえある。いささか強引なものいいをするならば、今日、社会経済活動をはじめとする現代文明のありようがすべて、環境という言葉に集約されてしまうような局面を迎えているのだ。環境の悪化を伝える報告が続々ともたらされ警鐘が打ち鳴らされるのに呼応して、環境を保全し、人類のみならずあらゆる種の存続をはかるべく、多角的に検討を加えることは当然、私たちのひとりひとりが担うべき切実な課題になっている。

しかしながら、錯綜する環境論議にさらされた私たち市民が何をどのようすればよいのかと私たち自身にやみくもに問いかけた場合、さらなる混沌を招来させるにすぎない結果に終わることも考えられる。だとすれば、環境保護のための市民活動やNGOに参加するといった行動を起こしたり環境政策の是非を論じたりするのに劣ら

ない、あるいはそれらの前提となるにちがいない重要な領域を真摯に模索する必要が生じてくるように思われる。あまりにも素朴な発想であるとの批判を甘んじて受けるとしても、私たちが何よりもまず第一に探るべき方向は個の次元に立ち返ることではないか。そしてまた、再考が迫られている環境ないし自然と人間との関係を自らの問題として認識すること、ひいては環境が論じられる現代の複雑な文脈をふまえつつ、両者の関係を主体的に再定位することではないか。私たちの生活様式や行動の判断基準になりうるのであれば、こうした模索は決して虚しい努力にはならない。エコロジカル・アイデンティティの意義はひとえにこの点に由来する。環境ないし自然と人間との関係性に新たな次元を見い出すためには、自己のありかたと位置を正確に認識することが問われるはずだからである。

本稿はいまだ覚え書きの次元に終始するのみであろうが、このエコロジカル・アイデンティティなる概念を紹介すると同時に、それときわめて密接にかかわっているばかりか、しばしばその本質を表象すると思われる〈場所の感覚〉についての考察を試みるものである。その際、古典的な事例として十八世紀イギリスの博物誌研究者ギルバート・ホワイトを取り上げるのが適切だと思われる。〈場所の感覚〉はアメリカで今日さかんに議論されている概念ではあるが、実際は環境と自己の関わりにまつわる認識を構築する契機として、時代や地域の如何にかかわらず広く適用される可能性と価値を秘めている。したがって、ホワイトについて考えることは〈場所の感覚〉が発生する要因やその意義のかなりの部分を触知すると同時に、私たち自身に当てはめてみる際の問題点を予感することにも通じてくる。

*

環境に対する一般の関心を高め、知見を広げるのに大きく貢献したものは何かと問われたとき、誰もがエコロジーという用語を思い浮かべるのではないだろうか。簡略化して言えば、エコロジーとは本来、「生物と無機的な環境との、また、ともに生きる他の生物との関係」を考察する生物学の一分野（生態学）の用語として十九世紀半ばに造り出されたものである。しかしながら、これは生物学的な狭義の意味にとどまりはしなかった。というのも、エコロジーの視座は人間とその活動をも組み入れること、つまり「他の生物に対する配慮を犠牲にした人間に対する配慮こそが環境悪化と今後起こりうる災害の根本的な原因であるとの反省」[1]に立ちながら、伝統的な西欧の人間中心主義（anthropocentrism）[2]からのパラダイム変換を指向し、人間を生物共同体―エコシステム（生態系）―の一員とみなす方向性を辿ったからだ。そして現在では、人間の生の質や自然認識のありかたへの積極的な再考を促す、ある種の政治性を帯びたイデオロギーとして認知されるにいたっている。

エコロジーあるいはエコシステムの意味するところに基づき、環境と自己との関係を確認する行為、その核心に位置するのではないかと思われるのが、近年私たちの視野にしばしば飛び込むようになったエコロジカル・アイデンティティである。その提唱者のひとりで、アメリカにおける優れた環境教育の実践で知られるミッチェル・トマショウによれば、

> エコロジカル・アイデンティティとは、大地との関係において人々が人格、価値観、行動、自己認識という形であらわにされるものとしての自分自身を解釈する際のさまざまな方法に言及するものである。自然は同一化（identification）の対象となる。個人にとって、これは尋常ならざる概念上の派生物を有する。生活経験についての解釈は社会的、文化的な相互作用を超越する。このエコロジカル・アイデンティティにはまた、一個の人間と大地との結びつきや生態系に対する知覚、さらには直接的な自然体験が含まれている。[3]

トマショウの意見は、もっぱら人間社会あるいは文化という脈絡において捉えられてきた主体としての自己の概念が、対環境、対自然との関係において新たな形で再構築される可能性があることを表明したものと理解できる。自己が自己であることを決定づける根幹において、自己と自己が生きる環境とのつながりが重要な役割を果たすとみなされているのだ。この、環境との関係を介して再構築されるであろう自己こそがエコロジカル・アイデンティティの謂いに他ならない。

だとすれば、エコロジカル・アイデンティティに到る契機はエコロジー的な次元での関係性を知覚するその過程のうちに求められる。しかも、その過程とは決して難解かつ思弁的なものである必要はない。トマショウの言う「同一化」とは自己と自然（の事物）がひとつの場（生態系）を構成し、ともに息づいていることを認知する行為だと分節されるからである。また、たとえば散策の途中で鳥の声に耳を傾けたり一輪の野草を眺めたりなど、私たちは日常的にさまざまな形で「直接的な自然体験」をしているが、その際に喚起される歓びや悲しみといった感情は私たち自身の生に対して自然が担っているはずの重要な意義を再発見し、再確認する精神の働きと密接につながっている。そうした瞬間を解析してみるとき、「人格、価値観、行動、自己認識」が自然との交感を介して形成される経緯を直感することが可能となるのではないか。そして、自然体験の意義がたとえ無意識のうちであれ蓄積されてゆくことで、私たちの思考は私たち自身がひとつの生態系のなかでどのように位置づけられるのかを考えること、つまりエコロジーの視角を準拠枠として展開され、私たちの生は自然との関係においてその妥当性が判断されるのである。

このエコロジカル・アイデンティティの意義を考察するとき、決して無視できない要素が存在することに留意しなければならない。「同一化」が自己と自然との間でなされる作用である以上、その作用を保証し、醸成させ

る場が重要な意味を帯びてくるのである。「同一化」の対象とされる自然はある特定の場において具体的な風景として、あるいは場それ自体として現出することではじめて何らかの実体をもつ存在として認識される。一方、人間もまた、つねにどこかしらの場に配置された存在であるからには、自己の再発見あるいは再認識にいたる契機は特定の場に位置する自己が自然とじかに対峙したときにこそ獲得される。要するに「同一化」が自己のありかたと自然のありかたとの間に連続性を見い出してゆく作用であるならば、その連続性は必然的にひとつの場における経験として成立しなければならない。このとき、場あるいは場所の問題が必然的に浮上する。

*

環境思想や環境文学／ネイチャーライティングの領域において、とりわけ七〇年代以降のアメリカから発信され、しきりに反復されている言葉がある。〈場所の感覚〉(sense of place)—むしろ〈場所の知覚〉あるいは〈場所に関する知識〉と言うべきか?—がそれだ。[4] 端的な定義を求めるならば、〈場所の感覚〉とは「ひとつの場所を、その生態系などの自然環境だけでなく、その歴史や文化をも含めた複合体として深く理解すること」[5]を意味する。

しかしながら、この感覚の詳細についてはより踏み込んだ考察が必要となってくる。その点からすれば、ウォレス・ステグナー(Wallace Stegner)の著わした、いかにも直裁な標題を戴くエッセイ「場所の感覚」(*The Sense of Place*, 1986)からは、この用語に込められた意味合いをめぐる微妙な議論を窺うことができる。冒頭においてステグナーは、この小篇が彼自らの敬愛する同時代人ウェンデル・ベリー(Wendell Berry)の発した言葉—「自分がどこにいるかを知らなければ、自分が一体誰であるかはわからない」("If you don't know where you are, you

don't know who you are.") ―に触発されたものであることを告白する。そしてベリーの発言につなげて、自らの想いを記す。

…私が、世界を享受し理解するために使うことができる手段は、私、ただこれだけなのだ。人間は、生まれた場所で育ち、そこで暮らし、そこを知り、そこで死んで初めて場所を場所として感じる。すなわち、一人の人間として、一族として、仲間として、共同体として、少なくとも二世代以上にわたってその場所を経験し、そこを形づくっていかなければ、場所は場所にはならないのである。はじめから自分の場所に生まれる場合もあれば、後になって場所を見い出す場合もある。また、ずいぶん捜したあげく、以前自分が去った場所が実はずっと捜し求めていた場所であったと気付く場合もある。しかし、人間の関わり方がどうであれ、場所はゆっくりとしか場所にはなりえないのである―珊瑚礁のように。(6)

ステグナーは人間が私の「場所」と呼びうるものを獲得し、そこに帰属感を見い出してゆく過程を、そして、ひとつの「場所」に根づくことで形づくられる「私」の生を印象深く語りかけやまない。人間は必ず「場所」に物理的に位置する存在であり、「場所」から切断されることはありえない。ステグナーが語る〈場所の感覚〉の根底には、こうした揺るぎない事実に対する嗅覚が働いている。

さらにもうひとつ、ステグナーの言葉に漂う時間の感覚も無視できないであろう。これについては、直接には〈場所の感覚〉を論じたものではなく、文脈も異なるが、桑子敏雄の発言がおおいに示唆に富んでいると思われる。桑子は人間と環境との密接な関係を検討した際に、身体的な存在としての人間が空間に配置されるという事実に着目し、「履歴」という概念を用いることで、その意味するところを説明している。

自己の履歴は、歴史性を含む空間のうちで形成され、それだからこそ、わたしはわたしとして存在する。したがって、自己の精神的な危機を、自己の配置された履歴空間の危機から分離することはできない。この空間での配置を問うこと、すなわち、わたしの履歴と不可分な空間の履歴の意味とを同時に問うことが課題である。(7)

この一節における「空間」を場所に置換することが許されるならば、桑子の認識はステグナーの発言とみごとに呼応する。「歴史性を含む」場所に位置することによってはじめて人間の自己それ自体が獲得されてゆく経緯を鮮やかにえぐりだしているからだ。場所から切り離されて自己はありえない。つまり、自己と「不可分」なものとしての場所と親密な交渉を経験することで、そこで暮らし、そこを知ることで、私たちの自己はより鮮明な像を結んでゆく。「場所」を発見し、「場所」に関する知識の蓄積を継続するという営みは私たちのアイデンティティを発見する行為と同義なのだ。

〈場所の感覚〉の意義をめぐる議論がアメリカで注目されているのは、それが、おそらくは移民／移動国家と称されることもあるこの国の歴史と文化と深く関わっているからだと思われる。ステグナーもまた、「この国の文化においては、今日にいたるまで、移動することはひとつの美徳にされてきた」(8)と述べているが、この発言には深い意味がこめられている。つねに拡散というベクトルをもち、結果として経験の平板化を招来しかねない移動の反復には自己の存在の基盤が絶対に存在しないという予感が、あるいはまた、個人の次元であるか共同体のそれであるかを問わず、生の蓄積という意味での歴史性の排除に通じる危険が直感的に反映されているのだ。アメリカにおける〈場所の感覚〉とは、従来の生活様式の根本的な見直しを促し、ひとつの場所と密接に関わることで創造されるはずの新たな自己の定位を、そして新たな自己の歴史を提起するものなのである。桑子の見解を

念頭に置いたとき、ステグナーの次の言葉は傾聴に値する。

歴史は、新世界へと出航するときに海に捨ててきた荷物だった。圧政、拘束、搾取、そして血なま臭い争いを思い起こさせるものだったからである。私たちは、歴史のない風景の中をひたすら進んできたことで、この国と人々に、よい意味ばかりでなく悪い意味でも影響を与えてしまった。侵略と移動を止め、落ち着いた時を得、所有の感覚ではなく帰属の感覚を持った時に、この国と社会は健康なものになりうるのである。(9)

この時点でようやく、〈場所の感覚〉についての先の定義に立ち返ることができる。ステグナーの言葉にも裏返しの形で含意されているように、「場所」は自然環境のみならず歴史や文化からも成り立つ複合的な空間だと理解される。つまり、人間の営みの場であるからこそ、「場所」が人間の生活を支える根、「帰属」すべき空間となっていることが重要なのだ。

このような認識に立つならば、〈場所の感覚〉が環境や自然をめぐる言説に頻出するのは決して奇異な現象ではない。都市であれ村落であれ、特定の形を帯びた風景として立ち現われてくる場所。現代思想としてのエコロジーの視座から換言した場合、そうした場所は人間と人間の活動をもその一部に組み入れた、誰もが自身にとって切実な問題として捉えるべき（狭義の生物学の次元を超えた）生態系を意味しているに他ならないのだ。人間はひとつの生態系で暮らしながら、同じくその生態系において「履歴」を有する植物や動物、さらには地理や気候を目のあたりにし、それらの推移や変貌を知覚してゆくことで「場所」を経験をする。そのような過程で生態系の一部としての自己を知り、ひいてはベリーの言うように「自分が一体誰であるか」という認識にいたる。そして、自然の豊かさのうちに自らの豊かさを思ったり、環境の崩壊や危機的状況がとりもなおさず自らの生それ

自体の崩壊に等しいと理解したりするのである。だとすれば、〈場所の感覚〉はエコロジカル・アイデンティティの中核をなしていると断言してさしつかえない。

〈場所の感覚〉をめぐって展開されている議論がアメリカという国固有の特性を主要な背景とした、ある種のメッセージ性が強いものであるにしても、[10] この感覚は私たちのすべてに重要な契機を提供しているように思われる。誰しもがそれぞれの場所に暮らし、意識するにせよ無意識のうちにせよ、場所に生を規定されていることを強く訴えずにはいないからだ。その厳然たる事実を受け入れるならば、改めて私たちと場所、そして私たちと環境との関係を見直すとともに、私たち自身の生を構築してゆくのが環境の時代に置かれた者として最優先すべき責務となるのではないか。「どこにいるか」を問わず、である。

このとき、すでに述べたように十八世紀のイギリスに生きたひとりの聖職者かつ博物誌研究者ギルバート・ホワイトの場合を考察することは、決して意味のないことではなくなる。彼の足跡は特定の場所に暮らすことの意味を訴えかけてくると同時に、〈場所の感覚〉とエコロジカル・アイデンティティと呼んでさしつかえないものが形成されてゆく過程を精妙に浮き彫りにしていると思われてならないからだ。ちなみに、アメリカのエコロジー思想と環境文学の起源はしばしばヘンリー・D・ソロー（Henry D. Thoreau, 1817–62）に求められるが、このソローがホワイトの著作に親しんでいたのは周知のことであるし、両者の影響関係については「いかにソローが自らを意図的にホワイトから差異化したかをみれば、ソローや彼に続く書き手たちに対する私たちの理解は深まってゆくはずだ」[11] といった評言さえ見られるところである。だとすれば、ホワイトを介して、アメリカとは歴史や文化はもとより、社会体制もはなはだしく異なる国で人間がいかなる認識を抱いたかを窺い知ることができるのではないか。個人と環境との関わりがいずれの場合も地方性に規定されて成立しなければならない以上、〈場所の感覚〉も個別的な地域特性を背景としながらその輪郭を明らかにするにちがいない。

*

ギルバート・ホワイト（Gilbert White, 1720–93）は生涯の大半を生まれ故郷の小村セルボーンで過ごした。そして牧師補という職務のかたわら、「はてしない自然というフィールドには観察すべき無限の余地があります」[12]といった想いや「ただひとつの地域を引き受ける人々には、精通できるであろう以上のことに手を出す人々よりも自然の知識を進展させる可能性があります」[13]といった使命感に突き動かされ、その地の自然観察に勤しんだ人物である。ふたりの人物に宛てた書簡の体裁をとりつつ、長年にわたる日々の記録を世に問うた『セルボーンの博物誌』（*The Natural History of Selborne*, 1789）は不朽の名著としていまだに高い評価を得ている。

この著作にはホワイトが自らを顧みて、考えるところを率直に吐露した言葉が随所にちりちりばめられている。だがホワイトについて何を論じるにしても、いやおうなく前提とせざるをえないのがデインズ・バリントンに宛てた書簡（一七六九年六月三〇日付）である。その冒頭でホワイトは次のように語る。

先月ロンドンに滞在しておりました際、私は博物誌という主題について、いつの日かあなたにお便りする光栄に浴したい旨の約束めいたことをいたしました。ところで、急遽そのお約束を果たす次第となりました。と申しますのも、あなたが非常に心の広い紳士であり、ご理解を示して下さる方だと承知しているからです。しかも著者が野外のナチュラリストであることを、すなわち他人の著作からではなく、対象それ自体から観察すべき事柄を得ていることを公言する場合に、とりわけ、あなたが心の広さとご理解を示して下さると了解している次第です。[14]

この発言の裏側では当時の博物誌研究の主流―文献という権威に依拠した標本分類と命名―に対する批判がくすぶっているのだが、今やはり注目すべきなのは、表面的には時代の趨勢にささやかな反旗を翻すそぶりを見せるかのような言葉、「野外のナチュラリスト」をおいて他にない。形式上、主語は「著者が」となっているが、これは疑いもなくホワイト自身に言及したものである。しかも、「野外のナチュラリスト」(“an out-door naturalist”)とは文字どおりに一種の同義語反復であり、洗練された語用だとは言いがたい。だとすれば、なぜ、あえて奇異な印象を抱かせるような言葉を選択したのか。その意図は単なる批判精神にとどまらない、明確な自己認識に起因していたのではなかったか。端的に言えば、ホワイトは「野外のナチュラリスト」のうちに自らのアデンティティを凝縮させているのだ。では、こうして宣言されたアデンティティの実質とは何か、また、〈場所の感覚〉はどうであるのか。手がかりはホワイトにおける重要な言葉のひとつであるに違いない「観察」(“observation”)のうちに潜んでいる。

『セルボーンの博物誌』本文の基礎となっているのはホワイトが丹念に記入し続けた日誌の類なのだが、その記述群には彼の「観察」の実態を彷彿とさせるものが少なくない。たとえば、彼が終生愛してやまなかったツバメに関する「観察」を挙げるとすれば、『ナチュラリストの日誌』(*Naturalist's Journal*)の一七七一年九月二十二日付の記載がその好例となりうる。

おびただしい数のツバメ。カバの梢が黄色に染まる。地平線上の低く垂れこめた雲。今朝はツバメたちが隣人のクルミの木の間で戯れていた。無数のツバメたちが夜明けとともにいっせいに飛び立ち、かなり遠くからでも聞こえるほどの鋭い羽音をたてた。その後、彼らの群れはまったく姿を見せない。ただ巣立ちの遅れた若

鳥と迷い鳥がいるだけであった。[15]

このように、ホワイトは「ありふれたこととして、しばしば見逃されてしまう創造の驚異」[16]に視線を注ぎ、「動物の生活と習性」[17]をつぶさに観察しては知識を蓄積してゆく。その結果として、新種の哺乳類の発見をはじめとする多くの優れた新知見を博物誌研究にもたらしてもいる。[18]この「野外のナチュラリスト」たるホワイトが『セルボーンの博物誌』において、あたかも自らの日常の「観察」を総括するかのような発言を何度か繰り返している事実には留意しておきたい。たとえば、彼は自らが作成した「鳥類に関するささやかな分類」に言及して、次のように述べている。

その記載に何らかの価値があるとすれば、それは几帳面さに由来するはずです。と申しますのも、何か月もの間、私は観察すべき鳥の表をポケットに入れ、徒歩や馬で職務に赴くおりには、どの鳥が鳴き続けているか、あるいは鳴きやんだかを、一羽ずつ毎日書きとめたのです。したがって、私の観察した事柄の正確さは、いかなる人物の報告書にも劣らないという絶対の自信がございます。[19]

あるいは、やはりツバメたちについて語る際に、「おそらく私の話は信用していただけることと存じます。とりわけ、私の主張いたしますことは、長年にわたる正確な観察の結果なのですから」[20]と断言してはばからない箇所も見い出せる。当時の最先端の科学である博物誌研究に要求された「正確さ」、それに対して「野外のナチュラリスト」が抱く「絶対の自信」は揺るぎないものであった。

ホワイトの言葉が決して誇張ではなかったことは、彼が愛してやまなかったツバメの類の生態―飛翔、採餌、

営巣、育雛など―に関するおびただしい記録によっても裏づけられる。だが、ホワイトの「観察」は決して「正確さ」のみに終わってはいない。よく知られた一節ではあるが、ホワイトは次のように書いたことがある。

ツバメの類はまったく悪気がなく、罪のない、心楽しませてくれる、社交好きな、そして有益な鳥の一族です。私たちの庭の果実には手を出しません。ただ一種を除けば、すべてが喜んで私たちの家になつきます。渡りをしたり、歌ったり、驚異的な敏捷さを見せたりしては、私たちを歓ばせてくれます。また、私たちの庭からブユや他の厄介な虫たちの煩わしさを取り除いてくれたりもします。[21]

この記述に現われた、まぎれもない感情移入と擬人化への傾斜はどのように評価されるべきなのか。現代では通用しない、時代を反映した記述様式に過ぎず、しかも客観性という絶対の基準から逸脱したものとして切り捨てられてしまうのか。そうではなく、ホワイトの観察と記述の様態はむしろ積極的に評価されなければならない。同じ場所を共有し、ともに生きるものとしてのツバメに向けられた親密な感情は『セルボーンの博物誌』に通底しているのだ。

リチャード・メイビーは生きものたちに傾けられたホワイトの愛着に注目し、イギリス社会において「教区」(parish)が担っていたはずの意義を明確に読み取っている。彼によれば、「教区とは…私たちが帰属していると感じている、定義不能でありながら評価可能な領域」であり、それに向けられる「忠実さは人間と同様に野生生物をも包括する概念であり続けた」[22]という。この鋭い指摘を受け入れるとするならば、セルボーン「教区」は人間と生物から構成される共同体にちがいなかったし、それは、現代エコロジーの用語で言えば生態系へと置換可能なものでもあった。[23] しかも、メイビーももちろん見抜いているように、ホワイトにとっての「教区」あるいは

生態系は単なる自然科学の次元にとどまりはしない。人間と他の生物がひとつの場所でそれぞれの位置を占めながら密接に関わり合っていることの意義、ホワイトはそれが自らの生に不可欠の歓びであることを確実に知っていた。

『セルボーンの博物誌』は単に自然界の事物をめぐる精緻な観察と所見の記録では終わっていない。この著作が博物誌研究にもたらした意義とは、博物誌の知見が人間からは独立したものとしてではなく、個人の感情と直接結びつきうるものとして捉えられているという一点につきる。ホワイトはごく自然に、「事実に関する知識と感情に関わる知識を融合させ、調和させる試み」[24]を実践している。先の引用からは、人間と自然との間に現出した関係性の瞬間さえ読み取ることができるのである。

周囲に注意深く眼を配ることで、ホワイトは「野外のナチュラリスト」たる自らの生を確立させ、同時に自然の事物が自らと同じ場所と空間を生きる存在であることを確認してゆく。このふたつは、彼のうちにあっては分かちがたく結びついていた。彼がエコロジーの概念を知らなかったのは言うまでもない。しかしながら、たとえ彼の依拠した伝統的な自然観が神の摂理の支配する〈エコノミー〉(oeconomy) という予定調和を謳ったものであり、[25]現代の知とは峻別されなければならないとしても、ホワイトはひとつの生態系をなすセルボーンに自らがその一部として組み入れられた現実を肯定している。しかも、心から。すなわち彼は、あらゆる生物間に成立する相互関連と相互依存の関係を内面化したのである。彼の日常は、自然との関係で規定される自己という意味におけるエコロジカル・アイデンティティ構築と接続していたと考えてさしつかえない。ホワイトのそうした営みを保証し、育む基盤は、セルボーンという場所をおいて他になかった。ホワイトはひとつの場所にこだわり続けなければならないのである。「観察」を継続する過程はとりもなおさず、自らが、そして生物が生を享受するセルボーンの地についての詳細な知識と歓びを獲得することを意味していた。これは、ひとつの場所に深く帰属

しているという感覚を育む過程と寸分違わず重なり合う。セルボーンは地理的な場所であると同時に心理的な存在にもなっていた。『セルボーンの博物誌』はこのとき「野外のナチュラリスト」が自らの〈場所の感覚〉へいたる軌跡を描いた記録として読まれなければならない。ホワイトの博物誌研究は動植物にまつわる知見を求める行為を突き抜けて、ひとつの場所に生きることの意義を、すなわち人間の根幹を凝視することと等価であった。『セルボーンの博物誌』はひとつの場所の物語でもあったのである。

*

博物誌研究を介してホワイトはセルボーンという場所についての知識を深め、その場所の一部であることを自覚し、ひいては「野外のナチュラリスト」たる自己を認識する。ベリーの言葉を借用するならば、ホワイトは「自分が一体誰であるか」を発見したのだ。その軌跡からは、〈場所の感覚〉が次第に鮮明な像を結んでゆくさまを如実に示す古典的なモデルを見い出せるのだが、私たち自身がこの感覚の意義を考えてみるとき、ホワイトから何を汲み取るべきなのであろうか。

〈場所の感覚〉が今日のアメリカでさかんに議論されている主要な要因にその国の歴史と文化とに向けられた反省があることはすでに述べたが、それをさらに一歩進めれば自己疎外に対する言いようのない不安へと敷衍できるかもしれない。環境問題のみに限定しても、熱帯雨林の消失、酸性雨、温暖化といった危機的状況が、結局は、個人や地域共同体の役割りと価値を排除しながら地球規模で拡散の一途を辿る社会経済活動に起因することは誰もが理解している。だが、そうした危機に個人としてどのように対応すべきかという課題に直面した場合、事態は容易ではない。科学技術に頼るにしても、ごく一部の人間を除けば、いわゆる客観性を標榜し、高度に専

門化されてしまったその領域を的確に評価することはほぼ不可能であるし、他方で、今日の問題を招来したのが当の科学技術に対する盲目的な服従ではなかったかとする不信感も払拭できない。まさに混沌とした状況でどう生きればよいのか。要するに、私たちは自らの手で自らを疎外してきたのである。こうした危機を見てしまったとき、本稿の冒頭で述べたような課題の実践のために私たちが模索すべきひとつの方向として、人間が置かれた場所の知識を深めること、つまり〈場所の感覚〉が浮上したのではなかったか。そして人間と環境との関係の真摯な再考が個人の次元で要請されるとすれば、それは、個人が生きる空間としての場所を考えることから出発しなければならない。博物誌はその際、有効な方法を提供してくれる。ホワイトの場合が物語るように、ひたすら自然を見続ける博物誌の視座が「知に人間の次元をもたらす」[26]という一点に収斂してゆくからだ。

ホワイトの影響を現代がどれほど受けているかについては即断しがたい部分がある。しかしながらホワイトが、そして『セルボーンの博物誌』に記された彼の足跡が「シダのように自らの葉から眼に見えない思想の胞子を飛散させた」[27]とだけは言えるかもしれない。ちなみにアメリカの著名なネイチャーライター、バリー・ロペスは「単にホッキョクグマ、あるいは他の動物、または植物や鳥に関して書かれた類のものとして、博物誌と向き合うのではない。博物誌とは生の基本的な問題に関わるものなのだ」[28]と述べたが、これは明らかにホワイトの営みと呼応する。何であれ観察で得られた知見は、特定の場所あるいは生態系の一部として生きる人間に連接されずにはいない。「知に人間の次元をもたらす」とはこのように理解されるはずである。周囲を観察するという行為はまちがいなく個人に実行可能であるし、経験的に獲得された知から構築される〈場所の感覚〉は生の基盤となりうる。

特定の場所における暮らしを通じてその場所を親しく知ること、自己と環境との関係を新たに意味づけること、ひいては環境に対して何らかの責任を果たすこと。これは困難ではあるが、エコトピアの夢想に耽るなどと

はちがって、決して達成不能な課題ではない。野の花であれ空の鳥であれ、その名称を知るならば、それがある意味を負荷された、親しいものとして私たちの心と生活のどこかに位置づけられるのはごく日常的な次元で繰り返される挿話であろう。ホワイトの場合がまさにこれに相当するが、さらに延長させると、アン・ツウィンガーの言うように「何かに視線を注ぎ、それをつぶさに観察し、問いを発し、答えを得て、学ぶとすれば、その何かは自らのものとなる。そして一度自らのものとなれば、断じてそれを破壊しないであろう」[29]という地点にさえいたる。

どこに暮らしているにしても、人間と自然との連続性を知覚し、同一の生態系に属する生物に関心と敬意を払い、風景に責任を負う。〈場所の感覚〉は環境の時代における私たちの生きかたを検証するための契機に他ならない。環境危機に市民として能うかぎり何らかの対応を講ずることは正しいであろうが、そのための確実な根拠として、私たちは一見迂遠としか映らないこの感覚を熟成させる試みから始める必要がありはしないか。しかも、それぞれがそれぞれの方法によってこの課題に立ち向かうことでようやく、異なる場所に育まれる他の人々や他文化に対する理解やそれらとの協同の展望も開けてくるはずである。

註

(1) Dobson, 51.

(2) 現代環境思想では、anthropocentrism にとって替わるべきものとして biocentrism（生命中心主義）あるいは ecocentrism（生態系中心主義）が提唱されているが、これらにしても〈中心〉と〈周縁〉なる概念を暗黙の前提とする点で伝統的な認識のパタンを踏襲している以上、結局は人間中心主義と同一次元に置かれるべきものであり、真にパラダイム変換を訴えるものではないのではないかという疑念は払拭きない。これについては、さらなる検証が必要であろう。

(3) Thomashow, 3.

(4) 〈場所の感覚〉が適切な訳語であるか否かについては現在のところ判断に苦しむ。訳語の確定を含め、この概念の精緻な検討をおおいに期待したい。日本にあっても、環境をめぐる言説の中核となりうるからだ。

(5) 山里、247°。

(6) ステグナー、115-16°。

(7) 桑子、163°。

(8) ステグナー、122°。

(9) ステグナー、123°。

(10) ここではネイティヴ・アメリカンの存在に直接焦点は当てられていない。しかしながら、彼らの伝統的な生活に意義を認め、それに学ぼうとする方向性はアメリカ人の意識のうちに確実に存在する。

(11) Stewart, xxii.

(12) White, *Natural History*, 122. 以下、*Natural History* と表記。

(13) *Natural History*, 125.

(14) *Natural History*, 109.

(15) White, *Journals*, vol. 1, 379.

(16) *Natural History*, 3.

(17) "the life and conversation of animals," *Natural History*, 136. *et passim*.「動物の生活と習性」は『セルボーンの博物誌』の鍵となる言葉のひとつでもある。

(18) Stewart, 25.

(19) *Natural History*, 117.

(20) *Natural History*, 167.

(21) *Natural History*, 145-46.

(22) Mabey, "Introduction" to *Natural History*, xvii.

(23) Worster, 20. を参照。この著作はホワイトをエコロジー思想の源流に位置づけてみせたことを含め、エコロジーの系譜を的確に辿った点で必須の文献である。

(24) Lueders, 3.

(25) この点については、『金沢法学』四二・二(二〇〇〇年)所収の拙稿、「『セルボーンの博物誌』における〈自然のエコノミー〉」を参照されたい

(26) Lueders, 65.

(27) Mazel, 32.

(28) Baryy Lopez and E. O. Wilson, "Ecology and the Human Imagination" in Lueders, 23.

(29) G. P. Nabhan and Anne Zwinger, "Field and the Literary Process" in Lueders, 72.

引用文献

Dobson, Andrew. *Green Political Thought*. 3rd ed. London : Routledge. 2000.

Lueders, Edward. ed. *Writing Natural History : Dialogues with Authors*. Salt Lake City : U of Utah P. 1989.

Mazel, David. ed. *A Century of Early Ecocriticism*. Athens : U of Georgia P. 2001.

Stewart, Frank. *A Natural History of Nature Writing*. Washington, D. C. : Island P. 1995.

Thomashow, Mitchell. *Ecological Identity : Becoming a Reflective Environmentalist*. Cambridge, Mass. : MIT P. 1996.

White, Gilbert. *Gilbert White : The Natural History of Selborne*. Ed. Richard Mabey. London : Penguin. 1977.

——. *The Journals of Gilbert White*. 2 Vols. Ed. Francesca Greenoak. London : Century. 1986–1988.

Worster, Donald. *Nature's Economy : A History of Ecological Ideas*. 2nd ed. Cambridge : Cambridge UP. 1994.

桑子俊夫　『環境の哲学』　講談社学術文庫　一九九九年。

ステグナー、ウォレス　「場所の感覚」(結城正美他訳)『フォリオ a』2　ふみくら書房　一九九三年　一一二―二四。

山里勝己「場所の感覚」『たのしく読めるネイチャーライティング』(文学・環境学会編)ミネルヴァ書房　二〇〇〇年　二四七。